

りました。

協議会の仕事に関わったことが契機で、専門図書館協議会や国連寄託図書館会議等の分野で仕事をする事になり、多くの図書館人との交流が出来たのは幸いでした。

図書館や研究所の仕事を離れて、大学院や学長室の仕事に移ってからは、直接協議会の仕事に関わることなく今日を迎えておりますが、情報の収集や分析において、その当時の手法が活着ていることを実感しています。

現在は、大学を定年退職後、設立に深く関わった「社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩」という大学を中心としたコンソーシアム組織で、多摩地域の教育を核としたまちづくりの事業に関わっております。

経済資料協議会の思い出

今 野 茂 代

(小樽商科大学ビジネス創造センター)

私が経済資料協議会（以下「経資協」）と初めて接したのは、小樽商科大学経済研究所に入った1984年です。文学部出身で、経済の「け」の字も分からず右往左往しながら24年間。経済研究所資料部主任でいらした長谷川伸三先生、また多くの経資協の皆様のご指導をいただきながら、経資協に係わってきました。前半は採録機関としての仕事のみでしたが、1998年から季報編集サブセンター、2000年からは理事機関を務めさせていただきました。最後は理事機関として組織改革検討委員会のメンバーにもなりましたが、結局のところ経資協の存続はかなわず、大変残念にまた申し訳なく思っております。

何故、経資協が存続することができなかったのか。図書館や研究機

関の内部・外部の環境の変化はもちろんですが、やはり採録の中止が大きかったと思います。

採録がなくなったことは、私にとっても大きなことでした。採録作業は自分自身に大変役立つことでもあり、また少なからず社会に貢献しているという誇りもありました。これがなくなったことで、経資協に参加し続けることに若干の疑問が生じたことも事実です。かと言って、採録を続けることは不可能。一方、採録負担をなくしても会員減少、特に機関会員の減少には歯止めはかかりませんでした。財政的な問題、人員配置の問題もあったかと思います。私もセンターの予算会議のたびにビクビクしていたものです。

研究会を中心とした組織への移行など存続を模索し続けましたが、解散という苦渋の決断をせざるを得ませんでした。

気の重い後半でしたが、最後まで会員で有り続けられたのは、気の重さを払拭する魅力がまだまだあったからです。研究会・見学会や総会で訪れることのできた場所、何より人的交流（ノミネーションとも言う）。経資協でお世話になった方々へお礼を申し上げるとともに、これからも何かの形でお付き合いを続けさせていただけたらと願っております。

協議会の思い出

是 枝 洋

(元法政大学大原社会問題研究所)

私が杉本先生のお世話で大原社研に入ったのは1965年9月、もう43年も昔のこととなりました。これが協議会とのご縁のはじまりでした。初めての季報の採録は労働関係の雑誌では採録基準に苦しみました。今までどういうのをとっていたのか調べたりして、迷いながら